

「ピラトの尋問」

ヨハネの福音書 18:28~38

はじめに

十字架にかかれるために、自ら捕らわれの身となったイエシュア。そしてそのイエシュアを最初に尋問した大祭司、アンナスとカヤパ。その年の大祭司はカヤパの方でしたが、実際の職権は、そのしゅうとである元大祭司のアンナスが握っていました。ユダヤ人たちはイエシュアをまずアンナスのもとに連れて行き、それから現職のカヤパのもとへと連れて行きました。当時ユダヤを支配していたローマ帝国は、一人の人物だけに権力が集中することを嫌い、本来終身制である大祭司職を度々交代させていたために、このようなことが起こったのです。ですからひょっとしたらこの時の大祭司が、カヤパとそのしゅうとアンナスではなかったかもしれないのです。だとすればこれは偶然でしょうか。たまたまカヤパ、偶然アンナスだったのでしょうか。聖書に記された出来事には、たまたま、偶然などはあり得ません。すべてが神様によって必然であり、必ず何かの意味を持っていると信じます。つまりこの時の大祭司はカヤパと、アンナスでなければならなかったのです。ではそこにどんな意味があるのでしょうか。このような人物に関する問いに対して、私たちの日本語に訳された聖書はもちろんのこと、新約聖書の原語とされるギリシャ語聖書でさえも、容易に答えることができません。しかしヘブル語は違います。イエシュアはユダヤ人としてお生まれになり、ヘブル語を話されました。なぜならイエシュアは旧約聖書の体現者であり、その預言の成就者であるからです。旧約聖書の原語はヘブル語です。ですからイエシュアについての出来事が記されたこのヨハネの福音書は、旧約聖書の原語であるヘブル語で解釈する必要があります。それでは今日の本文に入る前に、アンナスとカヤパ、この二人についてヘブル語で考えてみたいと思います。

1. アンナスとカヤパ

アンナス(אֲנָנְס)はヘブル語ではこのように表記され、その綴りがハーナン(חֲנָנִי)「恵む、あわれむ」という動詞と全く同じであることが解ります。つまりアンナスという名前には「恵む、あわれむ」という意味が表されていると考えられます。一般的に恵み、あわれみと聞けば、それは赦しや救いの手を差し伸べることが連想されますが、何の罪もないイエシュアを平手で打たせるようなアンナスがそのような人物であったかと思うと少々疑問です。ですからヘブル語で言う「恵む、あわれむ」という言葉の持つ意味が、私たちが捉えているそれとは少し違っているのです。これが翻訳の落とし穴であり、翻訳ゆえに生じてしまう誤解であり、ヘブル語で聖書を解釈しなければならない理由です。そしてヘブル語でその言葉の意味を調べる場合も、一つの法則があります。これはユダヤ人のラビ（聖書の教師）たちが実際に行っているもので「最初の言及の法則」というものです。これは聖書の重要な原理は、長子、初穂、最初に生まれることが基準であり、一番最初に出て来ることの中に本質的なことが啓示されているという原理です。ですからこのアンナスという名前に隠されたハーナン「恵む、あわれむ」という言葉を知るには、それが聖書で最初に使われた箇所を見る必要があります。この言葉が聖書で最初に使われている箇所は創世記 33:5 です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

33:5 エサウは目を上げ、女たちや子どもたちを見て、「この人たちは、あなたの何なのか」と尋ねた。ヤコブは、「神があなたのしもべに恵んでくださった子どもたちです」と答えた。

これはアブラハムの子イサクの子であるヤコブが、かつて長子の祝福を奪ったために、兄のエサウから命を狙われるほど憎まれた、その兄のエサウに再会した時の場面ですが、そこでヤコブは自分の子どもたちを「神が『恵んでくださった』子どもたち」と言っており、そこにハーナンという言葉が使われています。一般的にも子どもに恵まれるという表現は良い意味で用いられ、幸福と繁栄を表わします。しかし実際ヤコブはその神様が「恵んでくださった」子どもたちによって多くの問題に巻き込まれます。それ以前にも、子どもが生まれる、生まれないということにおいてもヤコブの二人の妻、レアとラケルの間にいつも争いがありました。その後、娘のディナが乱暴されたことの腹いせに次男のシメオンと三男のレビがその相手となったヒビ人の一族を皆殺しにするという痛ましい事件がありました（創世記 34 章）。また溺愛した 11 番目の息子ヨセフを他の兄弟たちが妬み、エジプトに売り飛ばすというような事件まで起こり、ヤコブは自分の人生をこのように振り返っています。

【新改訳改訂第3版】

創世記

47:9 ヤコブはパロに答えた。「私のたどった年月は百三十年です。私の齢の年月はわずかで、ふしあわせで、私の先祖のたどった齢の年月には及びません。」

このように、ヤコブは神様が子どもたちをハーナン、恵んでくださったにも関わらず、「ふしあわせ」な人生だったと言っています。一般的にも、子どもがどのように育ち、どのようなことを仕出かすかということは、親の人生に大きな影響を与えます。子どもが傷ついたり、そして死んだり、また犯罪を犯したりすることは、親にとっても大きな痛手となるのです。なぜならそこには神様から子どもを恵まれた、与えられた、任されたという責任があるからです。親には子どもを守り、養い育てるという責任、重荷があります。それはもちろん親としての喜びでもありますが、子育ては決してラクなことではありません。このようにハーナンという言葉が意味する「恵む、あわれむ」ことによって与えられるものは責任であり、重荷です。イエシュアの十字架とはまさにそのようなものであると言えます。ヤコブがその息子たちの犯した罪のために「ふしあわせ」すなわち苦しんだように、全人類の犯した罪の故に受ける苦しみ、それが十字架であり、イエシュアに与えられたハーナンであったということが、このアンナスという人物の名前に示されていると考えられます。

また、アンナスが意味しているハーナンには「恵む、あわれむ」という意味以外に、これとは全くかけ離れた別の意味があるのです。それはなんと「むかつく、いやでたまらない」という意味です。

ヨブ記

19:17 私の息は私の妻にいやがられ、私の身内の者らにきられる。

ここで「きらわれる」と訳されているのが同じハーナンです。「恵む、あわれむ」という意味からは全く想像もできないような意味です。しかしそれはまさにアンナスを始めとするユダヤ人の指導者たちがイエシュアのことを「むかつく、いやでたまらない」と感じて、心の底からイエシュアをハーナン、忌み嫌ったということが、イエシュアを最初に尋問したアンナスという人物の名前に示されているのです。

このように、アンナスという名前の中に、イエシュアの十字架が神様から与えられた責任、重荷であり、人類の罪の故に受ける苦しみであるということ、そしてもう一つ、それはユダヤ人に忌み嫌われることであるというこの二つの意味が表されていると考えられます。

次にカヤパ(קאפא)についてです。彼の名前にはカーファー(קאפא)、訳すと「固まる、凍結する」という動詞が隠されていると考えられます。このカーファーが聖書で最初に使われるのが出エジプト記 15:8 です。

【新改訳改訂第3版】

出エジプト記

15:8 あなたの鼻の息で、水は積み上げられ、流れはせきのように、まっすぐ立ち、大いなる水は海の真ん中で固まった。

これはエジプトを脱出したモーセとイスラエルの民が渡った海の中の道を歌った一節ですが、ここで「大いなる水は…『固まった』」という箇所にはカーファーが使われています。「大いなる水」とは「深淵」とも訳される創世記 1:2 に記されている「やみ」の存在を示す場所です。

【新改訳改訂第3版】

創

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

1:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。

つまりカーファーとは、やみの場所に「固まる」、すなわちそこから動かないことを指し示していると考えられ、さらにそれがどのような人を指すのかがゼパニヤ書の預言から解ります。

【新共同訳】

ゼパニヤ書

1:12 そのときが来れば／わたしはともし火をかざしてエルサレムを捜し／酒のおりの上に凝り固まり、心の中で／「主は幸いをも、災いをもくだされない」と言っている者を罰する。

このようにカーファーとは「主は幸いをも、災いをもくだされない」すなわち神様はいない、その存在を認めないという考えに「凝り固まって」いる人、かたくなな人を指し示していると考えられ、それがメシアとしてのイエシュアの存在を認めず、信じず、かたくなにカーファー「凝り固まった」ユダヤ人たちの指導者たちに当てはまると考えられます。その事実がこのカヤパという人物の名前に表されていると考えられます。

アンナス、そしてカヤパ、日本語やその他の言語の聖書では単なる人物紹介と状況説明であっても、このようにヘブル語で解釈するならば、そこには偶然とは言えない、深いメッセージが隠されていることが解ります。そのようなことに留意しながら、今日の本文に入っていきたいと思います。

2. 上げられた蛇

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

18:28 さて、彼らはイエスを、カヤパのところから総督官邸に連れて行った。時は明け方であった。彼らは、過越の食事が食べられなくなることをないように、汚れを受けまいとして、官邸に入らなかった。

驚いたことに、アンナスの時のような、現職の大祭司であるカヤパがイエシュアを尋問したその内容が全く記されていません。マタイ、マルコの福音書にはその尋問の様子が詳細に記されているのですが、このヨハネの福音書にはそれがありません。しかし他の福音書にはない方法でヨハネはこの時の様子を表現しているのです。それが先ほど述べたアンナスとカヤパという名前にあります。実はこの二人の実名を記しているのはこのヨハネの福音書だけで、他の福音書にはそれがありません。つまり名前の中に重要なメッセージがあることをこのヨハネの福音書は強調しているのです。しかもそれはヘブル語によってしか解き明かすことのできないものであるということ、そして聖書に記された人物も場所も全てに意味があり、神様のそのご計画がいかに緻密なもので、メッセージ性に富んだものであるかが示されているのだと考えられます。このように、状況説明によってではなく、アンナスとカヤパという実名の中に表す形で、イエシュアとユダヤ人の指導者たちとの関係が表されました。そして舞台は次にローマ総督ピラトの官邸へと移ります。

ユダヤ人の指導者たちは、次にイエシュアをローマ総督ピラトのもとへと連れて行きます。しかしユダヤ人たちは官邸に入りません。その理由は、過ぎ越しの祭り、それに引き続いて行われる「種なしパンの祭り」についての定めによるものでした。

【新改訳改訂第3版】

出エジプト

12:19七日間はあなたがたの家にパン種があってはならない。だれでもパン種の入ったものを食べる者は、在留異国人でも、この国に生まれた者でも、その者はイスラエルの会衆から断ち切られるからである。

祭りの間、ユダヤ人たちの家にパン種（イースト菌）があってはなりません。そればかりかパン種がある家、すなわち異邦人の家に入ることさえも汚れると考えていたようです。ですからユダヤ人の指導者たちはピラトの官邸の入り口から、逆にピラトを呼び出します。ローマ総督に対して、なんとも無礼な行為ですが、意外にもピラトはこれにあっさりと応え、自らその呼び出しに応じます。この様子から、当時ピラトはユダヤ人の指導者たちに対して、それほど大きな権力を持っていなかったことが解ります。それどころか、ユダヤ人の指導者たちがイエシュアを捕える際、一隊の兵士や千人隊長まで出動させるなど（ヨハネ18:12）、かなりいいように使われていた、利用されていたことがうかがえます。

18:29 そこで、ピラトは彼らのところに出て来て言った。「あなたがたは、この人に対して何を告発するのですか。」

このように、兵隊は派遣したものの、ピラトはイエシュアがどんな人物で、どのような罪に問われているか全く知らなかったのです。法廷に訴える場合、証拠や証言よりも前に絶対に必要なものがあります。それは訴える理由、罪状です。これがなければ何も始まらないのです。しかしユダヤ人の指導者たちはそれについてまともにも答えることができません。

18:30 彼らはピラトに答えた。「もしこの人が悪いことをしていなかったら、私たちはこの人をあなたに引き渡しはしなかったでしょう。」

悪いことをしたから連れて来た。普通ならこんな理屈が通るはずがありません。彼らは肝心の罪状について何も答えていないのです。罪状がなければ証拠も証言もあるわけがありません。ただ怒りに任せて自分たちの主張を押し通そうとしているだけなのです。

18:31 そこでピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、自分たちの律法に従ってさばきなさい。」ユダヤ人たちは彼に言った。「私たちに、だれを死刑にすることも許されてはいません。」

更にユダヤ人の指導者たちは、まともな罪状もないのに判決は死刑を求刑しています。どう考えても無茶苦茶な訴えです。彼らは自分たちが何をしているのか解っていないのです。先ほどのカヤパの名前に示されていたように、彼らは暗闇の中に凝り固まり、物事の分別がつかなくなっているのです。なぜこのようなことが起こりうるのか、その理由が次に記されています。

18:32 これは、ご自分がどのような死に方をされるのかを示して話されたイエスのことばが成就するためであった。

それは「イエシュアのことばが成就するため」です。イエシュアのことばは御父である神様の御言葉です。つまりイエシュアが十字架にかかることは、人の意志や悪巧みから出たことではなく、神様から出たこと、神様の御意志のみによって行われる、神様のご計画であるということです。事の主導権を握っておられるのは人ではなく、悪魔でもなく、神様ただお一人なのです。そしてその方法は十字架刑、正確には「モーセが荒野で蛇を上げたように」イエシュアに対してそれを行うことでした。かつてイエシュアはこのように語っていました。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

3:14 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。

3:15 それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」

モーセが荒野で蛇を上げた出来事とは、民数記 21 章に記されています。

【新改訳改訂第3版】

民数記

21:4 彼らはホル山から、エドムの地を迂回して、葦の海の道に旅立った。しかし民は、途中でがまんができなくなり、

21:5 民は神とモーセに逆らって言った。「なぜ、あなたがたは私たちをエジプトから連れ上って、この荒野で死なせようとするのか。パンもなく、水もない。私たちはこのみじめな食物に飽き飽きした。」

モーセの時代、エジプトを脱出したイスラエルの民は荒野での40年の放浪生活に入ります。その間彼らはマナと呼ばれる天から降って来る不思議なパンによって養われました。しかし彼らはこのマナを「みじめな食物」と呼び、これを拒んだのです。この出来事は天の御父から下って来た、遣わされて来たいのちのパンであるイエシュアを拒んだユダヤ人たちの姿を指し示していると考えられますが、この後にモーセが上げた蛇の記述があります。

21:6 そこで【主】は民の中に燃える蛇を送られたので、蛇は民にかみつきました、イスラエルの多くの人々が死んだ。

21:7 民はモーセのところに来て言った。「私たちは【主】とあなたを非難して罪を犯しました。どうか、蛇を私たちから取り去ってください、【主】に祈ってください。」モーセは民のために祈った。

21:8 すると、【主】はモーセに仰せられた。「あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上につけよ。すべてかまれた者は、それを仰ぎ見れば、生きる。」

21:9 モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上につけた。もし蛇が人をかんでも、その者が青銅の蛇を仰ぎ見ると、生きた。

イエシュアの十字架とは、イスラエルの民にこの「モーセが荒野で蛇を上げた」時の出来事を想起させ、その青銅の蛇を仰ぎ見た者たちが生かされたように、イエシュアを仰ぎ見る者は永遠に生きることを示すためのものであったのです。本来イスラエルにおける死刑は石打ちです。しかしこのことのためにイエシュアは絶対に十字架刑によって「上げられて」死ななければならなかったのです。モーセに蛇を作らせ、それを旗ざおの上につけるように命じられたのは神様です。このように、全て神様の命じられたとおりに、そのご計画のままに進められていくのです。

3. ユダヤ人の王

さてここからローマ総督ピラトによる、イエシュアへの尋問が始まります。しかしここに記されている内容はただの尋問ではありません。ピラトを用いてイエシュアは重要なメッセージを示そうとしておられます。

18:33 そこで、ピラトはもう一度官邸に入って、イエスを呼んで言った。「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」

18:34 イエスは答えられた。「あなたは、自分でそのことを言っているのですか。それともほかの人が、あなたにわたしのことを話したのですか。」

ピラトが尋ねている通り、イエシュアは「ユダヤ人の王」イスラエルの王です。しかしこの事実を自分で言う

のか、すなわち受け入れるのか、それとも他人事のようにそれを聞くのかでは大きな違いがあるということです。つまりユダヤ人、イスラエルを通してイエシュアを見るのか、それともそれらを軽視または無視してイエシュアを見るのかということです。冒頭に述べた、ヘブル語によってしか読み取ることのできないメッセージがあるように、ユダヤ人、イスラエル、そして王という観点を抜きにしては、イエシュアという御方がどのような存在であるかということを理解することができないのです。ですからピラトのこの質問は非常に的を得ていると言えます。さらに次の質問もそうです。

18:35 ピラトは答えた。「私はユダヤ人ではないでしょう。あなたの同国人と祭司長たちが、あなたを私に引き渡したのです。あなたは何をしたのですか。」

「あなたは何をしたのですか。」イエシュアがなされることは全て神様の御心、ご計画によるものです。それが一体何で、どのような意味を持っているのか、この問いかけを持つことは非常に重要です。「ユダヤ人の王」であるイエシュアが「何をし」、何をなさそうとしておられるのか、このような問いかけをする者に、神様はそのご計画を示して下さいます。それが次に記されています。

18:36 イエスは答えられた。「わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったなら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように、戦ったことでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。」

「わたしの国」すなわち神様の国、御国について述べられています。それは「この世のものではありません。」すなわちこの世から出たものではなく、またこの世に属するものでもなく神様から出たものであり、神様に属するものであるということが示されています。「ユダヤ人の王」であるイエシュアが「何をし」何をなさそうとしておられるのか、そのように問いかける者に、神様はそのご計画の完成である神様の国、御国を明らかにされるということの「型」がここに示されていると考えられます。それを次の節でイエシュアは「真理」と言い換えておられると考えられます。

18:37 そこでピラトはイエスに言った。「それでは、あなたは王なのですか。」イエスは答えられた。「わたしが王であることは、あなたが言うとおりです。わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」

真理に属する者、それは「わたしの国」神様の国、御国に入る者であり、その王であるイエシュアの「声に聞き従う」者であることが語られています。イエシュアはその御国の完成のために遣わされたことが語られていると考えられます。このように、この箇所はピラトのイエシュアへの尋問のその内容説明というだけではなく、「真理」すなわち神様のご計画である神様の国、御国が示されることの「型」であると考えられます。

4. ピラト

18:38 ピラトはイエスに言った。「真理とは何ですか。」彼はこう言ってから、またユダヤ人たちのところに出て行って、彼らに言った。「私は、あの人には罪を認めません。」

最後にピラト(Πιλάτος)という名前についてもヘブル語で見たいと思います。するとそこにパーリート(פִּלְרוֹת)「逃れる者、逃亡者」という意味の言葉を見つけることができます。冒頭に述べた「最初の言及の法

則」により、この言葉を調べるとそれは創世記 14:13 の記述になります。

【新改訳改訂第3版】

創世記

14:12 彼らはまた、アブラムのおいのロトとその財産をも奪い去った。ロトはソドムに住んでいた。

14:13 ひとりの逃亡者が、ヘブル人アブラムのところに来て、そのことを告げた。アブラムはエモリ人マムレの檜の木のところに住んでいた。マムレはエシュコルとアネルの兄弟で、彼らはアブラムと盟約を結んでいた。

「ひとりの逃亡者」これがパーリートです。そしてそれは「ヘブル人アブラムのところに来た」とあります。ヘブル人アブラムとはもちろんイスラエルの父祖アブラハムのことです。このアブラハムは息子イサクとともにモリヤの山（後のエルサレム）でイエシュアの十字架の型を示しました（創世記 22 章）。さらにアブラハムは神様の国、御国を待ち望む信仰をもった信仰の父です。

【新改訳改訂第3版】

ヘブル

11:8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。

11:9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。

11:10 彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。

十字架の型と、そしてこの神様が設計し建設される都、御国の信仰を持ったアブラハム、その彼に出会ったひとりの逃亡者、パーリート、それがイエシュアに問いかけをもって近づいたローマ総督ピラトという名前の中に示されていることは、「ヘブル人アブラム」の言語であるヘブル語でしか知ることのできない、隠されたメッセージであると考えられます。このように、イエシュアをユダヤ人の王として捉え、その御方が何をし、何をなさそうとおられるのかという問いを持ったピラトはまさに十字架と神様の国、御国の啓示のために用いられた神様の必然によって立てられた人物と言えます。そしてピラトはイエシュアについてこう宣言しています。「私は、あの人には罪を認めません。」と。つまり尋問の中でイエシュアの言われた全ての言葉には偽りがなく、真実であるということ、この世のものでない国、神様の国、御国はユダヤ人の王イエシュアによって必ず成就することを認めたということです。ピラトが個人的にこの事実、真理を受け入れたかどうかは不明ですが、神様はピラトの口を通してその御心を示されたと考えられます。私たちはついイエシュアが、神様が自分に何をしてくださるのか、または自分が何をしなければならないのか、このような問いかけを持ちながら聖書を読んでしまいがちですが、ピラトがしたように、イエシュアについて「ユダヤ人の王」として、そして「何をしたのか」何をなされるのか、この問いかけを持って聖書を読むことは神様のご計画を知る鍵となります。このように、私たちは神様のご計画を知るために聖書を読む者となってまいりましょう。